



名代官

心あったかニュース

NMCAA
NO3

前回の新聞は、映画「殿利息でござる」が実話で、町の人たちが自分たちの町のために、主に商人が頑張ったという内容でした。藩にお金を貸して、利息で町の財政を立て直すという、今までにないことをやれたのは、みんなの強い意志と結束でしたが、代官の功績も大きかったと思います。町の人たちの考えに感動して、上の役人へ何度も足を運んでくれました。Wikipeediaで代官を調べてみると、私達の代官のイメージはテレビからくる悪代官となってしまうのですが、実際は違ったようです。少しでも評判の悪い代官はすぐに罷免される政治体制になっており、私利私欲に走るような悪代官が長期にわたって存在し続けることは困難な社会であった。過酷な年貢の取り立ては農民の逃散につながり、かえって年貢の収量が減少するためである。実際、飢饉の時に餓死者を出した責任で罷免・処罰された代官もいる。代官所に勤務する人員の数は限られていたため、代官の仕事は非常に多忙

で、ほとんどの代官は悪事を企んでいる暇さえもなかったらしい。ということ。賄賂好きの女好きというのはテレビの脚色の世界ということを知って、実は当時の役人は下の者の面倒をみる助け合いの社会だったのではないかと思えます。下の社会でも村八分という悪い方面だけでなく、当時それだけ続いてきたということ、いい面も大きく、全体で助け合う絆社会であったように思えます。日本人が良心的であると、世界から言われますが、昔からの気質を受け継いで、多くの先祖の功績でもあると思います。名代官の大貫次右衛門證は、尾花沢代官でした。大凶作の時に、蔵を開いて粃を与えてくれたので、1人の餓死者もでなかつたことから、代官に感謝の意を表すために大貫大明神と書かれた掛け軸をかかげる行事が始まったそうです。芋代官と言われて親しまれているのは、井戸正明。飢饉の時、領民たちを早急に救うため幕府の許可を待たず年貢の減免、年貢米の放出、官金や私財の投入などを断行し、荒れた土地でも作ることでできるさつまいもの栽培を押し進めた。諏訪部権三郎は、災害のあった村のために、藩の許可を待たないで、数カ所の蔵を開け人々に米を与え食べさせた。その米は4,022俵、この

独断したということ。左遷されたが、村人は涙を別れを惜しんだそうです。寺西封元は、子間引き・墮胎の防止、小児養育に努め、公金貸付の資金で農村復旧をはかり農村人口の増加や心学講和会による農村教化に尽力した名代官です。塩谷正義は、70歳以上の老人を代官所に集めて敬老会を開くなど、現地の人々の人心掌握に務めた。災害時などに備えて米を供給するための備蓄米の蔵を建てた。大火の際には、この蔵米を被災者に配って災害支援に役立つ。目が不自由な人々を支援するために、生活に余裕のある人々から応分の寄付を得て六町歩の水田を購入し、年貢分を除いた36石をその養育費に充当するなど、福祉にも功績を残した。